

## 〔巻頭言〕

### 新しいリハビリテーション学を求めて

津 曲 裕 次

リハビリテーションと言う名前を耳にしたり、口にしたりするときに、何時も日本語なら何と言うのだろうと思う。

日本で、人生の途中で心身に障害を受けた人々を社会に復帰させるための営みが始まったのは、明治時代中ごろのことであった。それは、産業に機械が進出し、兵器に火薬が大量に用いられ始めたころであった。その意味では、西欧諸国においても、そんなに先に始まったわけではない。失明者には、教師、電話交換手や医療関連職、失聴者には工員や事務職、肢体不自由者にも事務職など、障害に応じた職業再訓練が行われた。こうして、二十世紀になって、アメリカやドイツからリハビリテーションの考えや技術が入った来たときに、それを、事後補導、職業再更正などと訳した。第二次世界大戦後の医学的リハビリテーションの導入にあたって、更正という日本語をあてはめることが多かった。

しかし、いつのころからか、リハビリテーションは、リハビリテーションとして、日本語を当てはめることをしなくなった。今や、リハビリテーションという日本語があるかのように使われている。あまり、根拠のある言い方ではないが、多分、1970年代の「リハビリテーションの10年」からのことではないかと思う。

そもそも、定義や概念とは、それぞれの国の文化によって規制されるものである。日本語になりにくいということは、それを受け入れる日本に、それに相当する概念がないことを意味するし、外来語としてそれなりに定着すると言うことは、それまでの日本にはなかった概念が生まれたと言うことを意味する。

それでは、今、私たちが、リハビリテーションという言葉で意味するものと、従来の事後補導や職業再更正、更正の意味するものとの違いは何であろうか。多分それは、その理念と範囲にあるのではないだろうか。

リハビリテーションの目的が、単なる「機能回復」ではなく、「人間としての権利の回復」である、と聞かされた人々は、目から鱗が落ちるような気がしたに違

いない。また、リハビリテーションには、職業リハビリテーションや医学リハビリテーションに並んで、社会リハビリテーションの領域があることを教えられた人々は、リハビリテーションとは、人間の生きるすべての領域に関係している新しい実践領域であることに気づいた。こうして、もはや、事後補導とか、更正という言葉では捉えきれない目的と範囲を持つ領域としてのリハビリテーションという言葉が、日本語として定着し始めたのであろう。

そして、それを可能にしたのは、どのような言葉のもとであっても、営々として、障害を持つ人々の社会への復権を目指して、営々として取り組んで来た実践者の存在であった。医療関連、教育、福祉、労働など、それぞれの領域での実践を、大きくくくる概念として、今、リハビリテーションという言葉が羽ばたき始めていると言ってよいであろう。

しかしながら、これまでの個別領域を越え、全体を見渡せる理論の構築は今後の課題である。リハビリテーション（学）とは、個々の実践を土台にしながら、更に、社会全体のシステムをも視野に入れた学問領域であることが求められる。今、私たちのコースでは、ようやく、その共通の基盤が出来つつあるということなのであろう。実践の場が違っても、共通の目的を持ち、お互いが関連しあっていると言う自覚を持つことが、リハビリテーションを真の日本語として定着させることが出来るかどうかの分かれ道である。本誌がその接着材として大きく育つことがそれを可能にするの一つであろう。大いに自戒し、努力したいものである。